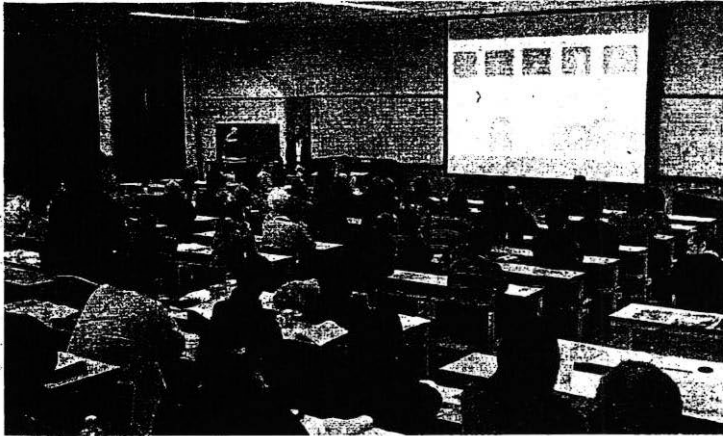


森林保全とシカ管理 セットで



共存を考えるシンポジウム

ニホンシカの増加による森林の生態系変化や、人間との共存について考えるシンポジウムが奈良市の奈良女子大学で開かれ、県内外から100人を超える研究者や学生らが参加した。写真。

同大学や奈良教育大学などの教授、一般会員らでつくる「紀

奈良女子大で開催

伊半島研究会(代表・和田恵次、奈良女子大教授)が主催し、今回で18回目。研究会では、大都市近くに位置しながら古い歴史と文化を築き上げてきた紀伊半島を、人間社会と自然が共生するモデルケースとみて、さまざまな研究活動に取り組んでいる。

2月28日に開かれたシンポジウムは、「森林とシカと人間の暮らしを考える」がテーマ。大阪産業大大学院の前迫ゆり教授は、シカと春日山原始林の共生や、生態系保全について講演。「森の保全とシカの管理は別々に論じるのではなく、セットで考え、市民も参加して地域全体で話し合う必要がある」と指摘した。

奈良女子大大学院で、生物の行動や分布について研究する中村麻紀さん(24)は「増加するシカの被害が大きいことに驚いた。頭数を管理していくことが大事だが、その方法は難しい。しっかりと対策を考えなければならぬ」と話していた。

シカの食害考える

紀伊半島 研究会 共存テーマにシンポ

急増するニホンシカの問題を考える、紀伊半島研究会(和田恵次会長)の第18回シンポジウムが28日、奈良市



森林とシカと人間の暮らしなどについて語られたシンポジウム。28日、奈良市北魚屋東町の奈良女子大。

北魚屋東町の奈良女子大で、**「森林とシカと人間の共存」**をテーマに講演などが行われた。

会員以外にも無料公開している。

今回は「森林とシカと人間の暮らしを考える」を演題に、生物学や農林研究の専門家らが講演した。

まず、奈良教育大学生物学教室の松井淳教授が、大台ヶ原や大峰山系のシカの生態と食害の近況を報告。大台ヶ原のトウヒ林の荒廃した様子を昭和30年代後半と現在の写真で比較し、シカによる食害の深刻な状況を説明した。松井教授は「シカの個体数を管理する」とが必要だと訴えた。

続いて、大阪産業大学大学院人間環境学研究所の前迫ゆり教授が、春日山でのシカの影響を紹介。植生へのダメージや今後の生態保全についての展望を述べた。